

教師として身に付けたい資質・能力

副校長 米津理臣

現在、国においては、2030年の社会と子供たちの未来に向けて、学校教育の在り方について検討が進められ、今年度は、「特別の教科 道徳」の教科書を採択する年となっており、さらに、来年度は、各教科の教科書の採択を行い、いよいよ新しい学習指導要領の下で学校が動き出します。

この新しい学習指導要領では、子供たち一人一人が、予測できない様々な変化に対して、受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であるとされていますので、今こそ、学校や教師の在り方、そして、指導力等が問われているのではないかと思います。

このような中、教師は、具体的にどんな資質・能力を身に付けていくとよいのかということを考えさせられます。

そこで、私はまず、教師としての子供を見る目を磨くことが大切ではないかと考えています。

「教育は、まず子供をよく見ることから始まる」と言われています。これは、教師が子供の様子をしっかりと捉えることの大切さを表している言葉だと記憶しています。しかし、「子供をよく見る」際の「子供を見る目」は、教師になったらすぐに身に付くものではないと考えています。この「子供を見る目」というものは、教師に「教育を見る目」ができた後に、身に付いてくるのではないのでしょうか。

そのため、教師は、常に教育について学ぶ姿勢をもち、一瞬、現れては消えてゆく子供の微妙な表情やつぶやき等から、気付きや発見、心の動きなどの目には見えないものを見取ることができる教師としての目と耳、そして、心について、日常の実践を通して磨いていく必要があると考えています。

私たち教師は、自分が見ている子供の様子が、必ずしも他の教師や保護者等と同様に見えているとは限らないということを理解した上で、子供の本当の姿を捉えることができる力を身に付ける必要があるのではないのでしょうか。

次に、本気で教育を語り、確かな実践をすることが大切ではないかと考えています。

もう20年以上前になるのでしょうか。新聞で「『四ない教師』が増え、各学校における教師の統一した力が失われてきている」というような内容の記事を読んだことがあります（「四ない教師」とは、教育雑誌等を読まない、自分の実践を文章に書かない、職員会議や校内研修で何も話さない、研究会や研修会に出たがらない教師のことを意味しています）。

この当時の新聞で取り上げられていることが、現在は、解消されているのでしょうか。

最近では、ワークショップ型の校内研修を行うなど、「何も話さない」という状況を作らないようにしている校内研修も見受けられますが、本音で教育について語ったり、議論したりすることができているのでしょうか。

現在の学校は、様々なことに対応しなくてはならず、非常に忙しい状況にあるため、自分とは関係の無いことには、正面から向かっていこうとする気持ちが薄れているように感じる場面も見受けられます。また、教師同士で議論等をすることによって、人間関係が壊れることを恐れ、本音で話さない方がよいという心が働いているのではないかと感じる場面も見られます。これでは、学校として目指す本物の教育は実現できないのではないのでしょうか。

そのため、教師は、日常の実践を通して、子供たちの話題等を職員室で出し合ったり、会議では、例年行っている教育内容や方法を見直し、新しい視点から一つでも工夫改善を図るための話し合いをしたりする必要があります。また、子供がどのように育ってきているかなどを本気になって語ったり、教師自身の教育観や信念に基づいて、本気になって実践したりする機会を設ける必要があるのではないかと考えています。

教師は、大学卒業までに得た教師としての知識や技術等や就職してから身に付けた知識や技能等が、時代とともに教育も子供も変化し、通用しなくなることを自覚し、常に研鑽に励み、知識や技術等を新しくし、その時代に相応しい資質・能力を身に付ける必要があるのではないのでしょうか。